

今回、BDD 症状は AMI では改善せず、CMI にて症状消失に至った。その理由として、CMI は SRI の一つで、セロトニンに対する再取り込み阻害作用が他の 3 環系抗うつ薬に比し強いことが挙げられる。また BDD は Obsessive Compulsive Spectrum Disorders (OCS) という疾患グループに含まれるとされ、OCS の代表的な障害として強迫性障害が挙げられる。その OCD の治療にはうつ病の治療に比し高用量の薬物が必要とされている。今回我々が用いた高用量 CMI によって初めて BDD 症状が消失したことから、BDD の治療にはうつ病に比してより高用量の薬物が必要なのかもしれない。

A-5) 新潟大学医学部付属病院精神科における DSM-IV 診断による初診患者の内訳
—DSM-IV 診断を 1 年間行ってみて—

渡辺	清美	・	渋谷	太志
福井	弘恵	・	本田	潤
天金	秀樹	・	澤村	一司
細木	俊宏	・	塩入	俊樹
柴矢	俊幸			(新潟大学 精神医学教室)

精神科診断学の流れに新しい転換期が訪れたのは、今から 20 年余りも前となる、米国精神医学会の公式診断基準である DSM-III が世に出た 1980 年である。それによって、それまでの各々の精神科医の経験のみに基づいた曖昧な診断から、診断項目を具体的に列挙し、その診断基準に合致さえすれば誰でもが一貫した診断を下せるという、操作的診断基準を用いるようになった。それから早 20 年が経ち、現在では DSM-IV (1994) や ICD-10 (1993) 等の操作的診断基準が欧米ではスタンダードとなっている。しかしわが国ではそこまでは至っていないのが現状である。

我々も 1998 年度より DSM-IV 診断基準を用い、新患および入院患者の診断を行っている。そこで今回、DSM-IV による疾患別頻度・内訳の検討、他施設（滋賀医科大学）との比較等を行ったので報告する。

調査対象は 1998 年 4 月 27 日～1999 年 9 月 10 日の間（約 1 年 4 ヶ月）に当科外来を初診した 1,041 人とした。男性 416 人、女性 615 人、平均年齢は 37.0 ± 18.75 であった。各診断カテゴリー別では、気分障害 263 名で 23.7%、精神分裂病及び他の精神病性障害が 153 名で 13.8%、以下不安障害 (12.3%)、適応障害 (8.4%)、身体表現性障害 (8.1%) となった。性差に関しては、男性に最も多かったのが幼児期、小児期、青年期の精神

障害で、男性が女性の 2.2 倍、一方女性では摂食障害が男性の 18.7 倍となっていた。ちなみに、幼児期、小児期、青年期の精神障害の中では特に注意欠陥及び破壊的行動障害が 7 : 1 ともっとも男女比に差が存在した。

4000 名以上の外来初診患者の DSM-III-R 診断を行っている滋賀医科大学付属病院との疾患別頻度の比較では、2 施設共に気分障害が最も頻度が高く、全体的にはほぼ同じ傾向が示された。当大学の特徴的な所見として、滋賀医科大学に比し摂食障害が有意に多いことが挙げられた。摂食障害の中では、神経性無食欲症が 44.1%、神経性大食症は 30.5% で、残りは特定不能の摂食障害と診断されていた。平均年齢としては、神経性無食欲症の方が神経性大食症よりも若い傾向が認められた。この障害が慢性・難治性であることを考え合わせると、出きるだけ早くこのような疾患を集中的に治療できる場を確保する必要があると思われた。また、DSM-IV 診断を不明とする症例が 45 名にのぼったことは、DSM-IV 診断への親和性がまだ乏しいことを示しており、今後も DSM-IV 診断を日常的に用いて、その診断の信頼性・妥当性をより高めて行く必要があると考えられた。

B-6) 長期入院中の精神障害者における糖尿病の治療とインフォームド・コンセント

梶 鎮夫・佐野 孝 (白根緑ヶ丘病院)

当院長期入院中の精神障害者 164 名（閉鎖病棟 84 名、開放病棟 80 名）について調査したところ、治療中のインスリン非依存性糖尿病患者は 19 名（男 12 名、女 7 名）であった。この人達について、血糖コントロールの良否、食事療法の遵守の良否、肥満度などについて調べた。その結果、19 名中 13 名では血糖コントロールはほぼ良好であった。肥満度とコントロール良否の関係では、-20% 以上の痩せた人ではすべて不良であったが、肥満者では一定の傾向は認められなかった。次に開放と閉鎖病棟と肥満度の関係を見ると 20% 以上の肥満者は開放に、-20% 以上の痩せた人は閉鎖病棟のみにみられた。

血糖コントロールと食事療法遵守についてみると、血糖コントロール不良の人はすべて食事療法遵守不良であった。

家庭よりも入院中、開放病棟よりも閉鎖病棟の方が食事療法を管理して行うことは容易ではあるが、閉鎖病棟での管理は自主性を妨げるなど問題があることを指摘した。

精神障害者においても糖尿病など身体疾患については、インフォームド・コンセントを行い治療を進めることは勿論であるが、治療を拒否した場合について症例を提示し、患者の決定権を尊重しつつも、繰り返し話合うことの重要性などについて述べた。

B-7) リエゾン活動が有用であった母子間腎移植の一例

田中 弘 (三島病院)
高橋 邦明・稲月 原 (新潟大学)
細木 俊宏・福島 昇 (精神医学教室)
吉田 浩樹 (小出本田病院)
斉藤 和英・谷川 俊貴 (新潟大学
泌尿器科学教室)

コンサルテーション・リエゾングループは腎移植患者全例に対し移植前後に精神的現在症を評価し、精神症状を呈した患者に対してはコンサルテーションの形で危機介入している。コンサルテーションのように問題が発生してから介入するのではなく、問題を起こす以前からかかわって移植チームや泌尿器科病棟看護スタッフとカンファレンスをもち、問題点の発見と対応に努めるというリエゾン活動を積極的に行なうことにより、問題行動を予防できた症例を経験したので報告する。レシピエント(患者)は19歳男性でドナーは母親である。慢性腎不全にて17歳で血液透析を導入、18歳より腹膜透析が導入され、この頃から、不潔恐怖・洗浄強迫が出現した。母は母子間腎移植を望んだが、父や祖父の同意が得られなかったため、母子は別居し、父と祖父の同意を得ぬまま腎移植を受けることを希望した。術前検査のために1999年2月に泌尿器科に第1回目の入院となったが、主治医や看護スタッフの指示を守らない、治療の手順を守らない、意に沿わぬことに反発して無断離院するなどの様々な問題行動がみられた。同年5月、移植手術を目的に第2回目の入院をした際、第1回目入院時のような問題行動を予防するためにリエゾン活動が開始された。問題行動の背景には、精神科の問題点として#1精神症状：不潔恐怖、確認強迫、慢性的な不安状態、#2認知力の低さ：治療手順や予定についての理解の悪さ、自己本位の頑固さ、#3家族の問題：祖父-父と母-子との対立、家庭内を調整するキイ・パーソンの不在、があると考えられた。このため内科透析グループや看護スタッフは移植手術の中止を主張した。このことも含めた腎移植の問題点に関して、泌尿器科、内科、麻酔科、薬剤部、精神科リエゾン主治医グループ、看護スタッフの合同カ

ンファレンスを行った。リエゾン主治医は精神症状の評価を述べ、#1に関しては頻回の精神療法を、#2に対して原因の精査と現実的な生活指導を、#3に対しては家族調節を行えば、精神科の問題点は改善する可能性があること、腎移植により代謝障害が改善すると患者の認知力が改善し、問題行動が減少する可能性があることを伝えた。父親の同意を得、手術が決定してからは、看護スタッフと精神科主治医グループとのカンファレンスを開き、問題行動を予防するよう具体的な対処法について検討した。また、泌尿器科医、内科医と共に家族面談を行い、家族は患者に対して受容的態度に変化した。術後は、拒絶反応が出た時期に多少の不安感の増強はあったが、問題行動を起こすには至らなかった。認知力が改善したことで強迫観念に対して自己洞察が著明に進み、強迫行為も軽減した。

B-8) 腎移植前後の事象関連電位の変化

吉田 浩樹 (小出本田病院)
稲月 原・加藤 靖彦 (新潟大学)
細木 俊宏・高橋 邦明 (精神医学教室)
福島 昇 (三島病院)
田中 弘 (三島病院)
前田 雅也 (佐渡総合病院
精神科)

【はじめに】新潟大学医学部精神科では腎移植前後のリエゾン活動を積極的に行っているが、移植後に「移植前に比べて頭がすっきりした」と述べる患者や、看護者による観察で「移植前に比べて物分りがよくなった」といわれる患者をしばしば経験する。これは腎移植前にあった極めて軽度の認知機能障害が、腎移植後に改善していることを推測させるものである。今回我々は、この腎移植後の認知機能のわずかな改善をとらえるために、腎移植前後で事象関連電位を比較したので報告する。

【対象と方法】対象は生体腎移植を行った慢性腎不全患者7名、男性3名、女性4名である。平均年齢は28.9才であった。すべての対象にこの研究について口頭および文書にて説明し、署名にて同意を得た。事象関連電位は、2000 Hzの標的刺激と、1000 Hzの非標的刺激をランダムに聞かせ標的刺激を聞いた時、迅速かつ正確にボタン押しをする、オッドボール課題を用いた。P300潜時は7名全員についてPz電極から得られた電位波形を用いて測定した。N200潜時については、Fz電極から電位波形を得た5名を本研究の対象とし、残りの2名はFz電極からの電位波形を得ていなかったためN200潜